

Initial Reading Instructionの問題点 —Production vs. Comprehension—

広島大学大学院

那 須 恒 夫

I はじめに

聞き、話し、読み、書くの4つの言語活動は音声形成と文字形式に区別されるほか、能動的な相と受動的な相にも区別される(①: 26)。ところで、最近、外国語学習の入門期において、comprehensionに重点を置いた指導に関わるいくつかの実験が行なわれ、そのような指導において、単に口と耳による指導より、好ましい結果が得られたことが報告されている。そこで本論では、上述の実験報告に基づき、comprehensionに重点を置く指導の観点から、A-L approachでのproduction中心の指導の際に生じてくると思われる問題点を考察する。

II Comprehension-oriented methodologyの形態

外国語学習において、言語の受動面が能動面に先行して教えられるべきであるとする原則が認識されるようになったのは、20世紀に入ってからであると言われている(②: 214)。この原則は、PalmerやGurreyの教授理論においては、今日のように、即座にspeakingを始めるのではなく、口頭訓練に移る前のある一定期間、聞くことに重点を置く指導法がとられる点に見られる。また、1960年代には、Pikeが水晶の核形成になぞらえて、readingを伴ったcomprehensionに重点を置く指導を説いている(③: 291-295)。このように、ある一定期間speakingを遅らすことにより、comprehensionに重点を置く指導法は、最近では、さまざまな指導形態をとっている。たとえば、10~15年前、カナダのGauthierの提唱した'Tan-Gan'方式、すなわち、英語話者にフランス語を教える際、教師はフランス語を話し、生徒は十分に話せるようになるまでは、英語で応答するというもの、とか、Asherの'Total Physical Response'と呼ばれる、命令を聞かせて生徒に動作をさせるもの、Winitz & Reedsによる絵を用いて意味がわかったか、どうかを示させるもの、さらに、Postovskyによる、生徒が十分にその準備ができるまで口頭訓練を延期し、その代わりに最初から読みと書くことを教える、などである(④: 229-239)。では、このようなcomprehensionに重点をおく指導法の理論的根拠が何であるかを考えてみよう。Winitz & Reedsは、発達心理学の立場から3つの理由をあげている。その第1点は、子供が母国語を習得する場合でも、大人が第二言語を学習する場合でも、まず聞いて理解できる力が要求されること、第2点は、短期記憶の重要性で、それは、初めて習う外国語の音声に対して、理解を伴わない場合、十分に機能しないこと、第3点は、母国語習得の過程において、子供は、8才までにその発音をほぼ完全に習得することから、外国語学習の場合でも、音韻体系の習得に先だって、口頭練習が強調されることは、言語習得の過程に反すること、である(⑤: 295-317)。

III Production-oriented methodology の欠陥

つぎに、本論では、Production 中心の指導を、集中的な口頭練習、すなわち、*pattern drill* や *dialogue memorization* などによって、より早く外国語が学べるという仮定に基づいた指導法(④: 229-239)とみなす。Wilkins は、A-L approach を唱導する論拠として、第1に初めから声を出させればより早く外国語が学べること、第2に、話し言葉の知識が書き言葉に、その逆の場合よりも容易に転移すること、第3に、書き言葉より話し言葉の方が学習者にとってより強力な動機づけとなること、の3点を挙げている(⑥: 56-68)。以下それらについて、具体的にその問題点を考察して見よう。

まず、第1の paradox として、話す力が向上すれば、聞く力も向上するという仮説が指摘される。この考え方は、Hoge や Hockett などにより支持されている(⑦: 411-413)。Fries は、外国語を認知し、了解する能力と発表し、話す能力は相補的な関係にあるが、外国語学習の初期の段階では、それらは、二つの異なった言語能力の面をなし、別の技能ととらえるのが役に立つのではないかと述べている(⑧: 8)。この Fries の見解は、初期の口頭練習が聞く力を損なう結果になったと報告する Asher などの実験結果から裏づけられる(⑨: 3-17)。さらにまた、入門期において、*pattern drill* などの口頭練習が行なわれると、生徒は、短時間のうちに、文型を繰り返すことだけに気をとられて、発音やイントネーションへの注意が散漫になったこと(⑩: 59-63)や、口頭練習中心の授業では、各生徒は活発に口頭練習を行なっているものの、教師の正しいモデルを聞く以上に、自分自身や他の生徒の誤った発音を聞く機会が多く、それが正確な発音習得の妨げになったこと(⑪: 229-239)、などが実験結果として報告されている。

第2点については、従来、いくつかの教育実験がなされ、1968年の Chastain と Loerdehoff の A-LH と CC-L の比較実験では、4技能すべてにわたり、後者の方に好ましい結果が出ている(⑫: 268-279)。さらに、1965年から1969年にかけての4年間に亘る、*Pensylvania Project* での3つの教授法による比較実験でも、A-L approach による話し、聞くことから読み、書きへの転移が十分なされたと証明するには至らなかったようである。しかし、この点に関しては、まだまだ多くの信頼できるデータが必要であり、早急に結論を出すことは避けるべきであるように思われる。

第3点について、A-L approach が外国語学習者にとって、強力な motivation になることは、1964年のコロラド大学での Scherer & Wertheimer の A-L approach と伝統的教授法との比較実験から、前者の方が、外国語学習の動機と態度の点において、後者の場合よりもすぐれた結果をもたらしたという報告がなされているし、また言語適性の低い生徒は、口と耳による方法に動機づけられることも報告されている(⑬: 243)。しかしながら、動機づけの問題は、単純ではなく、Rivers は外国語学習の3つの段階で動機づけの様々な問題が生じて来ることを指摘している。それは、言語学習の開始時期、言語との取り組み、及び高度の段階での永続的言語習慣の固定の際であり、とりわけ、生徒があらゆる複雑性の中で言語に取り組むようになる第2段階において、詳細に検討する必要があるように思われる(⑭: 80-90)。以下、Rivers によれば、この段階で、生徒は3つのグループに分類されるが、注目すべきグループは第1と第2である。第1グル

ープには、言語材料を保持する力の弱い生徒が含まれ、彼らは、全く途方にくれてしまい、その結果、失望と絶望に落ち入り、やる気を失くしてしまう。第2グループには、着実な英語の向上は見られるが、興味を喪失しつつある生徒が含まれる。こういう生徒のいく人かについて、Agard & Dunkel は、生徒が文法や読み方でよりも耳と口によってより強力に動機づけられるようであったが、彼らの初期の熱心さや興味は、教材の内容を同化することが徐々に困難になるにつれて衰退していくとの調査報告をしている(⑤: 292)。それゆえ、単に初期の興味や熱心さがあると、必ず言語学習それ自体に興味をいただくことを意味するものとみなすには危険があるように思われる。

IV む す び

このように考察を進めると、音声主体の A-LH 理論に基づく入門期の指導が、その目標を達成するのに十分妥当な方法であるかどうか再考の余地があるように思われる。そこで、今後、文字の受動面に着目した指導法が考えられるべきである。

(参 考 文 献)

- (1) Abercrombie, D. (1956), *Problems and Principles in Language Study*, (Longmans, Green and Co., Ltd.).
- (2) Kelly, L.G. (1969), *25 Centuries of Language Teaching*, (Newsbury House Publishers).
- (3) Pike, K.L. (1960), 'Nucleation' *MLJ*, 44, 7.
- (4) Postovsky, V.A. (1975), 'On Paradoxes in Foreign Language Teaching,' *MLJ*, 59, 1.
- (5) Winitz, H. and Reeds, J.A. (1973), 'Rapid Acquisition of a Foreign Language (German) by the Avoidance of Speaking,' *IRAL*, 11, 4.
- (6) Wilkins, D.A. (1972), *Second-Language Learning and Teaching*, (Edward Arnold Ltd.).
- (7) Muller, D. (1965), 'The Effect upon Pronunciation and Intonation of Early Exposure to the Written Word,' *MLJ*, 49, 7.
- (8) Fries, C.C. (1945), *Teaching and Learning English as a Foreign Language*, (University of Michigan Press).
- (9) Asher, J.J. (1969), 'The Total Physical Response Approach to Second Language Learning,' *MLJ*, 53, 1.
- (10) Dodson, C.J. and Price, J.E. (1966), 'The Role of the Printed Word in Foreign Language Learning,' *MLJ*, 47, 2.
- (11) Postovsky, V.A. (1974), 'Effects of Delay in Oral Practice at the Beginning of Second Language Learning,' *MLJ*, 58, 5-6.
- (12) Chastain, K.D. and Woerdehoff, F.J. (1968), 'A Methodological Study Comparing the Audio-Lingual Habit Theory and Cognitive Code-Learning Theory,' *MLJ*, 52, 5.
- (13) Scherer, G.A.C. and Wertheimer, M. (1964), *A Psycholinguistic Experiment in Foreign-Language Teaching*, (McGraw-Hill).
- (14) Rivers, W.M. (1964), *The Psychologist and the Foreign-Language Teacher*, (University of Chicago Press).
- (15) Agard and Dunkel, H.B. (1948), *An Investigation of Second Language Teaching*, (Ginn).